「今日の説教、聴き手のために」

（講壇-10）　2015/1/4　　明治学院教会　　岩井健作（前牧師）

『命の道を歩め、警鐘に耳を澄ませよ』　エレミヤ書６章１３節－１７節

１、２０１５年。新しい年を迎え、今年はいっそう「預言者たち」に学び、彼らの後を追う年だ、という思いを深くしている。特に、紀元前７世紀、不真実な世の中にあって、神の真実を語って苦悩しつつ、神の裁きと救いを語ったエレミヤの生涯が思い出される。今日はエレミヤ書の６章から、三つの事を学びたいと思う。

２、まず第一、時代状況の認識。「身分の低い者から高い者に至るまで、皆、利をむさぼり、預言者から祭司に至るまで皆、欺く。彼らは、わが民の破滅を手軽に治療して、平和がないのに『平和、平和』という」(13-14)。日本の現状との重なりを覚える。「争点はアベノミックス」「集団的自衛権行使」「原発再稼働」というカネと武力の論理で選挙をやり、勝利した。はやばや「武器輸出に国が資金援助」（12/17, 1/1, 東京）が検討されている。やりたい放題である。投票率は戦後最低の52%,「議会制民主主義が『自壊状態』に陥る兆しとして受け止めている。」（岩崎正洋・日大教授 12/15 東京）「日本国は倒産しましたのであとは勝手に・・とはいきません。[grow or die]ではなく [how to live]を問うべきときではないか」と「『カネ優先』見直すとき」（内田樹 12/18 東京）と訴えられている。格差、差別、軍事化、言論自主規制・統制へと一段と社会が傾いてゆく年を覚悟しなければない。厳しい冬の時代である。

３、第二、「如何に生きるか」の思考。「さまざまな道に立って、眺めよ、昔からの道に問いかけよ」(16)。イスラエル民族はアッシリヤ（後バビロニヤ）、エジプトの列強に挟まれ様々な価値観や宗教の影響を受けてきた。地中海沿岸民族ペリシテからの「バアル神（経済を至上価値とする）」が、権力と結びついてからは、ヤハウエ（主）信仰との熾烈な戦いが繰り広げられた（「エリヤの戦い」は顕著。列王上 18 章）。エレミヤの時代それは「ヨシヤ王の宗教改革（申命記 12-28 の発見による）B.C.621-622」（列王下 22 章）として起こった。彼の生涯で出会った大きな政治事件である。エレミヤはヨシヤ王の援護をした。「金か命か」。古くはエーリッヒ・フロム　『生きるということ』（TO HAVE OR TO BE1976, 佐野哲郎訳 1977 紀伊国屋）や暉岡淑子『豊かさとは何か』（1989 岩波新書 85・・「豊かさとは人間と人間の関わり」を示唆）が語っている。ヤハウェ信仰は「昔からの道」「命の道」である。

４、第三、「命を守る生き方の避難所を作り出す」。「その道を歩み、魂の安らぎを得よ」(16)「耳を澄ませて角笛の響きを待て」(17) とある。「命の道」を歩んで人生半ばで逝った小田原紀雄（69）さんの事を、この言葉と重ねて思う。彼は「牧師」で山谷労働福祉センターの設立者（朝日）であった。「革命家」といわれる程に「反天皇制」との闘いを続けた。彼の予備校講師（河合塾・古文）は生活のためだとばかり思っていた。追悼集会で生徒たちの追想を聞き、どんなに彼が優しく暖かい人であったかを知った。現代の「人間の避難所」を思わせた。教会も「魂の避難所」の一面を担いたい。

「今日の説教、聴き手のために」　（講壇-11）　2015/2/15　明治学院教会

『み言葉は、わが足の灯』　　岩井健作（前牧師）

詩編　119編105－112節

１、詩編119編は詩編のなかで最も長い詩、「いろは歌」です。ヘブル語のアルファベットを頭文字にした８行の詩が２２連、続いています。「律法」（本文では「あかし」「み言葉」「法」「定め」「命令」「戒め」「ことば」「律法」の八つの言葉で表示）の大事さを指摘します。この詩の「生活の座」（背景）は、歴史的にはイスラエル民族がバビロニアの捕囚の後期に、富める者は外国の支配者に馴染み、異教化されたた中で、唯、主の掟を単純化して信じた底辺層の詩人の詩だと言われています（関根）。彼らが、足の灯として、「律法の精神」を信じて、迷わなかった実践的教訓詩です。（現代日本に例を取れば、米国の新自由主義の富中心に媚びて戦争も肯定する風潮の中で、お金ではなく「命と暮らしを守れ」、と単純に叫んでいる庶民の感覚のようなものです）。個々の契約（守るべき法）ではなく、律法の精神を非常に単純化して大事にします。

２、今日の箇所の「み言葉は」は「ダーバール（言葉）」というヘブル語です。「後ろから前へ押し出す」という意味で、言葉の力が強調されます。母親の言葉が子どもの背後から力になるようなものです。哲学者の鶴見俊輔さんが戦後鬱で何も出来なかった時、隣の部屋で遊んでいた、子どもの「いろはがるた」を聴いて自分でも「いろはがるた」を作ったのが戦後の彼の哲学の営みのきっかけだったそうです。（『日常的思考の可能性』１９６７筑摩「かるたの話」）。「カルタ」には不思議な力があります。彼は自分の「カルタ」を作ることをすすめています。言葉の力が発揮されます。

３、私は、神学校を出て、牧師になってからは、毎週説教をした訳ですが、「先生の話は、難しい（観念的）」と言われて大変悩みました。先輩の牧師に相談をしました。彼は寄席やお芝居に通って、笑いと涙の感動に共感する事が生活になっている人です。駄洒落のうまい人で、説教の中で、みんなを一回は笑わす、という特技を持った牧師です。君には無理だろうな、と言って、諺を使ってみたらどうだろうか、というアドヴァイスをしてくれました。それは神学の体系的言説を、経験的・生活的な知恵に翻訳をするということでした。例えば「あなたの隣り人を愛せよ」は「向かう三軒、両隣り」を使って表現する如く。認識情報（神学）を行動情報（信仰の証詞）に置き換えるといってもよいと思います。「雨だから気をつけなさいね」。人生最後に母が、息子（老練な医師）に語ったのを聴いて感動した事があります。また、介護を「掛け替えのない」時とした事を証しする一通の手紙のことを思い出します。「道の光」とは人生の希望という意味でしょう。しかしそれは、道全体を浮かび上がらせるような光ではないのです。「歩みを照らす灯」なのです。僕らの子ども時代は提灯でした。今は懐中電灯です。それもLEDです。「言葉は肉となってわたしたちの間に宿られた」とはイエスその人を示した新約のヨハネの言葉です。それは「足の灯」である導き手なのです。「肉」は抽象概念ではなくて、目に見える、日々を活かす道しるべなのです。祈ります。

「今日の説教、聴き手のために」　（講壇-12）　　2015/3/1　明治学院教会

『神の句読点』　　岩井健作（前牧師）

聖書　フィリピ２章１節－１２節

選句「それも十字架の死に至まで従順でした」

１、「句読点」は、文章を書く時に付ける「、」や「。」のことです。「句読点」の付け方で、文章は生きもし、死にもします。　これを比喩的に用いて、あるいはそこに隠喩的（メタファー）意味を含ませて用いている、ある事柄の表現に出合った事が今も大変心に残っています。

　１人の後輩が、私の知人が上司になる教育関係の職場に就職しました。しばらくして、「彼はどうですか」と声をかけたら、ちょっと渋い表情で「彼は句読点が打てない人でしてねー」とこぼされました。ちょっと理解しかねたのですが、どうも「生き方にけじめがない」という意味以上に、一緒に仕事をしていて、常に「第三者的」で、関係存在として、一緒に生きているものへの、気遣いだとか、思いやりというか、それがちぐはぐで、責任のとり方が本当には出来ないという意味だと分かりました。人は良い人なのだけれど、チームの仕事では仲間の重荷になっているらしいのです。そのことを彼自身が感じていないことが、閉塞感を醸し出しているのです。それ以来「人生の句読点」とは自分だけでの事を始末するだけではなくて、「共に生きる出会いの共同性の中での生き方」を含めていると感じています。関係のというものは、いつも「自分中心」「自分本位」が死んで、相手によって自分が相対化されるところに、新しく生まれます。関係を持つ事は「句読点を打つことによって」、新しく、神によって与えられる創造的は業なのです。このことから、読み慣れたフィリピの聖書の言葉を想像しました。

２、さて、今日の聖書箇所は、フィリピの手紙のなかでも有名な「パウロのキリスト論」です。これは初代の教会で、教会の仲間がお互いに謙遜の心をもって、交わりをするようにという勧めを説いた一節に出てきます。キリストを模範にしなさいと諭したところです。そして「キリストのへりくだり」が述べらます。それは「死に至るまで」の徹底したものでした。しかし、初代の教会ではそれがすでに観念化・固定化・形骸化したので、それを破る意味で「十字架の死に至るまで」と付け加えたのがパウロだったとの指摘（青野）は新鮮な解釈です。言葉は常に固定化、観念化します。どう言い換えるかではなくて、そこで「ピリオド」（終止符）を打って、その沈黙に耐える時、次の出来事が始まります。９節の「このため」は、その句読点の先の出来事を語ります。「神によるキリストの高挙」です。「死による断絶を前提した上で」、全く新たな「あらゆる名にまさる名が」与えられます。ここには、主語の転換が見られます。十字架の死に至る道の主語は「キリスト」ですが、「高挙」の主語は「神」です。「句読点」が事柄を別けています。これは「神の句読点」です。

３、もう２３年前にいただいた一冊の絵本のことを今思い出します。『かみさまのおてつだい－ぼくびょうきでいいんだねー』（えとぶん佐原良子　同朋出版　1993）契児君は生まれつき心臓が悪くて、三回の手術のあと、五歳でとうとう天に召されました。その子が、病気に「句読点」を打って、病院で、他の病気の子を励まし、いたわり、神様のお手伝いをする生き方に変わっていった、というお話です。亡くなったあと心臓病の親の会が出来て活動をはじめたと言う感動的物語りです。

「今日の説教、聴き手のために」　(講壇-13)　2015/3/15 明治学院教会

『勘定済み』　　岩井健作（前牧師）

聖書　マルコ１４章３２節－４２節　「もうこれでいい」(41 節)

1、画家渡辺総一氏は抽象画的に「ゲツセマネの園での祈り」を描きました。写実的な小磯良平氏の「ゲッセマネの祈り」とは対照的です。しかし構図はよく似ています。「地に臥して祈るイエス」「眠れる三人の弟子」「神を象徴する光」「深閑とした風景」。渡辺さんは、ゲッセマネがオリーブを絞るという意味があるのに重ねて、オリーブの木を三本図案化し、朱色のコップ・ブドウ酒を配し、暗に「贖罪」をテーマにしています。「汗が血の滴るように」（ルカ 22:44 のみ）を思わせ、神学的です。小磯さんのイエスは天を仰いで、「アッバ」（お父さん［マルコのみ]）と祈ってます。

2、物語の前半のテーマは「弟子達の無理解」です。祈りの伴走者であるはずの弟子ペトロ、ヤコブ、ヨハネ、は「目を覚ましていなさい」との促しにも拘らず眠ってしまいます。「心は燃えても、肉体は弱い」。何度もイエスに従うと告白をしながら、挫折をするあの古い人格は「シモン」（マルコのみ）と呼ばれています。イエスの　「眠っているのか」(37) との疑問文は叱責を含んでいます。弟子の無理解はマルコ福音書の一貫したたテーマです。三回にわたる（8 章以下）受難予告を、弟子たちは理解していません。このゲッセマネでもイエスは三回弟子たちに問いかけます。**「御心に適うことが行われますように。」**（３６）が究極の祈りであることは言うまでもありません。「祈り」とは此の事なのです。

3、物語の後半は、イエスの弟子たちへの「愛と赦し」が示されています。41 節では、「眠っている」と事実だけが述べられ、イエスの弟子たちの有りのままの姿への受容が示されます。このゲッセマネでのメッセージの一つを、ここに読み取ることは大いなる慰めです。ここには、十字架の死に向うイエスの内面の厳しさとは対照的に弟子たちへの赦しと受容がにじみ出ています。「心は燃えても、肉体は弱い」と。

4、決定的なのは「もうこれでいい。時が来た。・・立て、行こう」という言葉です。「もうこれでいい。（アペケイ）」は、元来は商業用語で、「支払い済み、勘定は済んでいる」という意味です。イエスは眠る弟子に「祈りの勘定はもう済んでいる」と語ります。祈れないことへの執り成しでります。「受難」というテーマでイエスを５４の連作を描いたのは画家ジョルジュ・ルーオーです。そのイエスは、厳しさと、慈しみが二重に描かれているような作品です。「裁き」と「赦し」は二律背反です。しかしイエスの慈しみには、この二重性が秘められています。「わたしたちはどう祈るべきかを知りませんが、“霊”自らが、言葉に表せないうめきをもって執り成してくださる」（ローマ 8:26）とのパウロの言葉を想起させます。弟子は眠りながらもなお「立て、行こう」と十字架の道行きに一緒に行くように招かれています。ペトロ、あの挫折せるものにも、なお招きが、と思うと慰め深い出来事です。

5、讃美歌２１－６０「どんなに小さい小鳥でも」は菅千代さんの詩です。彼女とは京都で CS 教師を一緒にいたしました。菅隆志牧師夫人として仙台で良い働きをされました。「よい子になれない」。とてもいい言葉だと思っています。ある教会に赴任した時、初めてお会いした方の挨拶がとても印象的でした。「私いい信者じゃあ、ありませんよ」。でも、言葉とは裏腹に、終始教会の縁の下の力持、社会では目立たない「反戦平和」への奉仕を、持続してなさっておられました。「支払い済み」の愛を内に秘めた生き方が、右傾化する日本での「キリスト者」の働きです。

「今日の説教、聴き手のために」　（講壇-14 ）　2015/4/26 明治学院教会

『言葉と主体』　　岩井健作（前牧師）

聖書　ルカ　６章３９節－４５節、ローマ８章２６節

「“霊”自らが、言葉に表せないうめきをもって執り成してくださる」

1、谷川俊太郎の詩の一節です。「・・・あんたは　わたしのまえにいるけれど／なんだか　テレビでみているみたい／けしちゃいたいけど／すいっちがない」。（『はだか－谷川俊太郎詩集』）。主体の懸かっていない饒舌な言葉の語り手への痛烈な反撃です。言葉は伝達やコミュニケーションに便利なものですが、相手の心に届かない言葉や、主体がかかっていない言葉は、なるほどと社会通念や常識として整っていても、わざわざ言うことはないのです。むしろ黙っていて欲しいものです。

2、「盲人は盲人の手引き道案内をすることができようか。二人とも穴に落ち込みはしないか」（ルカ6:39）。指導者が駄目だと、とんだことになる、という古い諺だと言われています。ルカ福音書ではイエスの「平野の説教」の終わりの部分に、マタイの平行句はマタイ15:14 に使われています。ここに収録されるまでには、イエスの言葉群を纏めた「語録集」（Q）教団の考え（神学）がベースにある、と研究者は言っています。全体の文脈からは、やはり当時の教団の指導者層への不誠実、言行不一致への批判として用いられています。けれども、盲人に対するイエスの他の言葉（ヨハネ9:3, マルコ8:22, 10:46f）から、イエスが盲人を悪い例にたとえた、とは考えられません。盲人は盲人として認めて生きること、「神のみわざが、彼の上に現れるためである」（ヨハネ9:3, この「肯定」に生かされた方はたくさんいます）というのがイエスの主張です。もし、イエスが言ったとすれば、盲人が社会的差別のゆえに盲人同志もたれ合って穴に落ちる悲惨があってよいのか、という社会批判として、また盲人の自立への促しを暗に諺の裏に含ませて語られた逆説的言葉として受け取られます。この諺を用いいてイエスが語られたならば、盲人差別の再生産につながるような語り方はしなかったでしょう。ルカの教団の指導者が駄目なのであれば、書き手が「あなたたちは駄目だ」と面と向かって言うのが「主体」的発言です。「木と実の関係」の例話からすれば、ルカの教会も言行不一致に悩んでいたかも知れません。これは、現代を含めて、歴史の中を歩む教会が負い続けてきた課題でもあります。

3、イエスの言葉は、イエスの十字架の死に極まる生涯と重ね合わせる時、それは、一般的格言、教訓、であることを破って、相手の主体を奥底から揺さぶる言葉となります。例えば、前回述べた「もうこれでいい（アペケイ）」（マルコ14:41）においても、弟子の無理解、弱さを承知で「受容し、赦す」イエスの「十字架の主体」があっての言葉でありました。言葉は、語り手の主体自身が言葉の内容を引き受けている出来事において生きた言葉となります。パウロは「福音」を「十字架の言葉」（コリⅠ1:18）と表現しました。いったいそんなことは可能なのか、という恐れがあります。

4、そこに登場するのが、ローマ8:26の「“霊”の執り成し」です。これは「祈り」に付いての箇所ですが、広くは「言葉への執り成し」です。我々の言葉はまさに“霊”が意味する「神との関係」に繋がり、開かれている時、言葉の主体たり得るのでしょう。「原発を再稼働するな」「言論の自由に圧力をかけるな」「戦争の準備体制をするな」「辺野古の基地建設を中断せよ」「格差を広げるな」「保育を守れ」「北村牧師の免職を撤回せよ」等など、主体のかかったキリスト者でありたいと思います。

「今日の説教、聴き手のために」　（講壇-15 ）　2015/5/17 明治学院教会

『すべての人が食べた』　　岩井健作（前牧師）

聖書　マルコ　６章３０節－４４節、

「イエスは五つのパンと二匹の魚を取り、天を仰いで賛美の祈りを唱え、パンを裂いて、弟子たちに渡して配らせ、二匹の魚も皆に分配された。すべての人が食べて満腹した。」(41-42)

１、「貧しい、って」どんなこと？保育園の子供にお話をした時に聞いてみました。「御飯が食べられないこと」という返事がどっと帰ってきました。そうです。「すべての人々が」みんな御飯が食べられる社会は、私たちの究極的悲願です。キリスト教的表現をすれば、「救い主による天の祝宴」にすべての人が与かることは終末論的な信仰です。横浜寿地区の諸問題への取り組みの中で寿日雇い労働者組合や神奈川教区寿地区センターが「炊出し」を始めたのは１９９３年です。『第22次寿炊出しの会報告集』が教会にもきています。「格差・貧困」には政治の酷さ、経済の構造、社会・人間の問題が当然あります。一方で多面な闘いをしながらも、足下の共に「パンに与かる」（飯を食べる）「炊出し」を祈りつつ取り組んでいるのが関係者の日々です。

２、今日は聖書のマルコ福音書の「５千人に食べ物を与える」という物語を読みました。「この種の伝承の成立基盤には、日毎の糧に事欠く民衆がイエスに託した希求があったと想定してよいであろう。教団伝承として成立する過程で三つの要素が加えられた。第一、旧約聖書の背景、列王下4:42-44,（ エリシアが２０個のパンで１００人を飽かせた）。第二は。礼典的要素、聖餐の原形が予想されている（MK14:22 ）。そこには礼典的な言葉の強い響き、「・・・彼は（天を）仰いで・・・・祈りを唱え（パンを）裂き・・・分配された］がある。第三に、終末論的要素。「天の喜びの祝宴」への希望。この要素が中心になって、伝承が定着した（荒井献『イエス・キリスト』p.265)と言われています。

３、マルコにはルカ、マタイにはない表現「飼う者なき羊」（24）があります。民族の指導者がいないイスラエル全体を表現する旧約聖書的術語（民数27:17,エゼキエル34:5）です。「青草」(39)は詩編23を想起させ、牧者のイメージを与えています。この物語（供食の奇跡）の一つの機能は、人々がイエスという「真の牧者（羊飼い）」に出会った事実を鮮明に示すことでした。牧者は「一緒にいて、世話をし、魂のケアー」をしてくれる人です。マルコは「イエスとは誰か」を追及しています。ペトロは「あなたこそメシア（救い主）だ」(8:29)と告白しました。でもその中身が不鮮明、また政治的です。イエスは「パンを分かち与える」奇跡を行う牧者だと、この物語は明確に語っています。奇跡は「不思議（miracle)」ではなくて「驚くべき出来事（wonder）」です。それは、「パンを与える」という礼典的意味をも象徴し、天の祝宴の予めの表象でもありました。その様な、全体をこの物語は含んでいます。

４、日本基督教団教師北村慈郎さんは、寿地区委員会委員長です。つまり「炊出し」の元締めです。礼拝に参加した人は「すべて神に招かれている」という理解で、担任している教会の要請もあり未受洗者を含めた「聖餐式」を実施しました。そのことが原因で「教師免職」の戒規処分になりました。受洗者のみの「聖餐式」はそれなりの意義があります。でも「すべての人が」与かる聖餐式の聖書的根拠がここにあります。

「今日の説教、聴き手のために」　（講壇-16 ）　2015/6/14 明治学院教会

『あなたがたの手で』　岩井健作（前牧師）

聖書　マルコ　６章３０節－４４節、

＜「あなたがたが彼らに食べ物を与えなさい」とお答えになった。弟子たちは「わたしたちが二百デナリオンものパンを買って来て、みんなに食べさせるのですか」と言った。「イエスは言われたパンは幾つあるのか。見て来なさい。」＞（37-38）。

１、「五千人に食べ物を与える」奇跡物語の前半に注目したい。「奇跡」の場面設定である。まず、マルコ福音書が一貫して弟子たちのイエスへの無理解を記録している書物であることを覚えておきたい。田川建三氏によれば、当時の教会の福音理解を弟子たちの無理解という形で批判したという（『原始キリスト教歴史の一断面』200 頁以下）（参照6:52）。イエスは群衆の「飼い主のいないう羊のような有様を深く憐れ」(34)んだ。弟子たちも、かれらの食事に心配りをしたが、それは群衆の自己責任で、解散し各自が買い出しに行くという知恵であった。これに対して「あなたがたが（の手で－口語訳）食物を与えよ」がイエスの答えだった。さすが弟子たちは思いがけない返答に「わたしたちが・食べさせるのですか」と、戸惑いを隠せなかった。ここに注目したい。「四千人への供食」(8;1-9) でも「これだけの人に食べさせる事ができるのでしょうか」といっている。この疑問文はイエスへの反発である。

２、ペトロを初めとする弟子たちは、一切を捨ててイエスに従がって来た人間である(1:16-20) 。しかも「使徒とされ、派遣・宣教・悪魔を追い出す権能を与えられた」(3:14-16) 者たちで、「あなたがたには神の国の秘密がうちあけられている」(4:11) といわれた人間である。今や、イエスの人気は絶大である (4:1)。弟子たちの心の底には群衆とは違うのだ「俺たちは弟子だ」というプライドがあったに違いない。このプライドこそイエスへの無理解であった。イエスは「わたしの後に従いたい者は、自分を捨て、自分の十字架を背負って、わたしに従いなさい。自分の命を救いたいと思う者はそれを失うが・・・」(8:34-34) といっている。福音の逆説性であるが、弟子たちは、まず「命」どころか自分でも気が付がついていないプライドさえ捨てられなかった。イエスはそこを、とことん追及はしなかった。やがてペトロは十字架の道を独り進むイエスを裏切り泣いた (14:72)。プライドのペトロに死ぬ場面である。

３、イエスは群衆に食物を与えることの出来ない弟子たちをありのままに受容した。「プライド」に死ぬことは後回しにした。そこを飛び越えて、先に進む「方法論」を提示する。「パンは幾つあるのか。見てきなさい」(38)。ここでかの有名な「五つのパンと二つの魚」が登場する（大麦や少年と物語を粉飾するのはヨハネ福音書6:9)。「己を捨てる」という課題を背負ったままで、なお「手持ちのもの」が少しでもあれば、それを大事にして生きる課題が弟子たち与えた。二重の課題である。手持ちの所有だけで勝負をするのは、現代の言葉で言えば「政治（権力）至上主義」「経済（資本）至上主義」に過ぎない。そこでは奇跡は起こらない。人間への収奪、疎外、抑圧が増幅・拡散し、破綻が見え隠れする。

４、「プライド」「自己本位」を捨てること、「手持ち」がないと卑下・悲観しないで、「手持ち」（生存そのもの、生命、交流、集団、個性、賜物｛タラント｝・等々）を見極めつつ、二つの課題を生き続ける、その先に驚くべき（不思議ではない）「奇跡（神の業）」が起きる。信仰とはその「奇跡」に信をおいて生きることである。・

「今日の説教、聴き手のために」　（講壇-17）　2015/7/26 明治学院教会

『“見失った一匹”が問いかけるもの』　　岩井健作（前牧師）

聖書　マタイ１８章１０節-１４節、ルカ１５章１節-７節

「九十九匹を山に残しておいて迷い出た一匹を捜しに行かないだろうか」 マタイ 18:12

「九十九匹を野原に残して、見失った一匹を見つけ出すまで捜し回らないだろうか」 ルカ 15:4

1．「羊飼い」は聖書に良く出てくる話である。羊を飼う文化で生活していない我々は、想像して理解する他はない。または我々の経験に置き換えて納得するのが精一杯である。だから、聖書のテキストに向かっては、常に「謙虚」でありたい。断定的な読み込みや、型にはまった通俗的理解で、「分かった」積りになってはなるまい。「９９匹と１匹の羊」の話にしても、多くの人が先入観による自分流あるいは「教会流」の解釈を抱いている様な気がする。讃美歌２１-２００番などもその一つであろう。

2．このイエスの譬えには、マタイ版とルカ版がある。この箇所の詳しい研究を表わした荒井献氏（新約聖書学者）によれば、イエスの語った譬えの原形はルカの 15:4 だという。マタイは「一匹」を「迷いでた」とマイナス評価をし、９９匹を「山」（エルサレムを暗示する安全な聖域）に残し（保護し）、一匹を多数の主流派の共同体につれもどすという思想である。当時の文脈でいえば、信仰の薄い「迷いでた」信徒を、９９匹の迷わない教会という聖域に保護されている強い教会員のところに連れ戻すのが、牧会に専念する「羊飼い・司牧者」の任務だという主張である。

3．ルカ版も「一匹」は悔い改めの必要のある「罪人」とマイナスの理解をするが、イエスの話の原形は９９匹について、「荒れ野に放置」しても「いなくなった羊のもとに歩いてゆく」（共に荒井訳）羊飼いがイメージされている。羊飼いは羊を９９匹という多数派の共同体に連れもどすことを任務とはしていない。９９匹を荒野（野獣が横行する）の危険にさらしても、なお一匹に同行する羊飼いが示唆されている。ルカの場合は１節から３節までの状況設定を考えると、「９９匹」とはイエスが「罪人たちを迎えて食事まで一緒にしている」ことを非難した「ファリサイ派の人々や律法学者たち」のことである。彼らを「悔い改めの必要のない正しい人」といっているが、これは皮肉を込めた批判的言辞だという（荒井）。パリサイ派など（９９匹が暗示する集団）が危険と不安にさらされるように仕向けていることは失われた羊を尋ねる羊飼いが行動で示している社会批判なのである。・・

4．最近、大崎博澄さんという方の「不登校という希望」という運動の記録・論考を読んだ（雑誌『ひとりから』57 号所載）。不登校の子供を学校に連れ戻すのではなく、彼／彼女が何を訴えているかを探ることに希望があるという。不登校のことは本当には研究も進んでいないという。これを読んでいて、失われた羊に同行する羊飼いを思い出した。それは、イエスの歩みと重なる。聖書の他の表現を借りれば、地上を十字架に向って旅する「神の子羊」の姿である。福音の恵みが示されている。

5．ご存じのように、私ども夫婦は、不思議な導きで、７月７日、高崎市の社会福祉法人新生会（聖公会）の老人ホームに移った。理事長原慶子さんの理念は、国の市場原理主義に流された福祉政策に強い抗議をしながら、足下では、実に丁寧に暖かく老人個々人をケアーする方針。実際に生活をはじめて見て、聞きしに優る素晴らしさである。失われた一匹の羊に同行する羊飼い、を想像させ、同時にイエスの振る舞いを深く思わしめさせられた。

「今日の説教、聴き手のために」　（講壇-18 ）　2015/8/30 明治学院教会

『逆説の彼方』　岩井健作（前牧師）

聖書　フォリピ　　１章３節－８節。

＜あなたがた一同のために祈る度に、いつも喜びをもって祈っています。＞(4)

１、フィリピの教会は使徒パウロにとって麗しい関係にあった教会だといわれています。パウロが伝道の困苦の生活にあったとき、物心両面で援助をした教会です(4:15-16）。パウロはこの書簡を記した時、牢獄に捉えられていました(1:13)。ですからこの書簡は獄中書簡と呼ばれています。

２、パウロが獄中だということで、フィリピの人たちはパウロのことを心配していました。当然の人情でしょう。指導者の不在が不安を招きました。しかし、パウロは「兄弟たち、わたしの身に起こったことが、かえって福音の前進に役だったと知ってほしい」（1:12）と激励します。彼らは「投獄は福音の前進」という、信仰の逆説の理解には至りませんでした。「病による母親の不在が子供たちをしっかりさせる」という理解の様なものです。しかし。そこまでの感覚のない事をパウロは憂います。

３、パウロにとっては「あなたがたを覚える」ということは、実は、ただ配慮するということ以上の事でした。その教会が「逆説の信仰」の豊かさに目覚めることを願っての事でした。このことは、そこにまで導いていない、パウロの自分自身の牧会の限界と力不足の自覚と裏表していました。ある意味では自分の不甲斐なさの自覚です。喜ばしいことではないのです。私なども、一つの教会を長い間牧会してきて、その教会がたとえ表面上は問題なく成長しているようでも、各個人の「信仰の逆説」が豊かでない事を思うと、自分の無力さをつくづく思います。

４、パウロはコリント教会ならいざ知らず、フィリピの教会の逆説を宿さない直裁な、無垢な信仰のあり方を今一つ距離をおいて見ています。しかし、フィリピの人々たちに対して神は必ずあなた方の中で救いの業を成し遂げて下さるに違いないという確信を持っています(1:6）。

５、だから祈るのです。「わたしは、こう祈ります。・・・ほんとうに重要なことを見分けられるように」と。祈りは感謝、執り成し、祈願、そして懺悔です。パウロは「喜びをもって祈る」と言っていますから、フィリピの教会そのものの存在への感謝があるでしょう。しかし、それ以上にこの世的にはマイナスの出来事が「福音の前進」であるという逆説を宿した教会に成長することへの「執り成し」の祈りがあったと思います。パウロが伝道者として自ら味わっていた「信仰の逆説」がそんなにすぐ分かるとは思っていなかったでしょう。そういう意味では、パウロは麗しい教会との交わりにおいてもなお孤独です。しかし、彼らのために、祈るということが、自身にとってその孤独を破る喜びなのです。だから「喜びをもって」祈るのです。

６、「逆説」というものは、言葉や、説明で伝わるものではありません。また、自分自身の努力でも理解できるのではありまでせん。霊の導きを受けて、経験と生活で納得するものです。例えば「弱い時こそ強い」「負けるが勝ち」「苦難をも喜ぶ」「貧しいひとたちは幸いである」。自分自身に対してさえも、まして相手がその様な信仰の境地に至る様にとは、祈る以外に方法はありません。「逆説の彼方」の祈りです。祈りが希望なのです。

「今日の説教、聴き手のために」　（講壇-18 ）　2015/9/2030 明治学院教会

『慰める力』　岩井健作（前牧師）

聖書　詩編１２１篇１節－８。　コリントⅡ　１章３節－７節。

＜あなたがの出でたつのも帰るのも主が見守ってくださるように＞(Ps121:8) 。

＜私たちも神からいただくこの慰めによって、あらゆる苦難の中にある人々を慰めることができます。＞(CorⅡ1:4)

1、「目を上げて、私は山々を仰ぐ」。詩編121 編は、「山辺に向いて、われ目をあぐ」（54版301）の別所梅之助作詞の讃美歌とともに日本人の信仰に深く根付いている。私もこの詩と共に、若き日、教会のキャンプでの夕陽会（夕べの礼拝）で、家族から離れ、「私はここにいる」という単独者の自覚を深されたことを思い起こす。この詩は一人称の「私」を自覚させる。人生の旅路は基本的に「独り」であり、その自覚が初めて、家族への、友人へに、同志への、社会への、直接性でない関わりを新たに生み出す。「独り」になれない者は、ほんとうに二人にはなれない。まして、交わり、連帯、共同といった社会への関わりが上っ面になって、深まらない。この詩は人生の旅路が基本的に「独り」であることを、そして「独り」であるとは恵みであり、人間を超えた「神」の業であること悟らせる。そこは「慰め」の働く場である。

2、この詩の生活の座は明確ではないが、ほぼエルサレムへの巡礼者が「旅の歌」として用いたとされている。対話のある交唱の形式がとられている。一般に旅に出る子供に父が祝福と激励を与えたのか、エルサレムの礼拝（祭り）を終わって帰途につく民に祭司が激励の声を掛けた礼拝文なのか。いずれにせよ「旅の備え」の詩である。「神ともにいましてゆく道をまもり」の讃美歌（54版405）を連想させる。

3、「山々」。二つの説がある。神殿のあるエルサレムの山々。「山」は天に近く、神を想像させる。日本人の自然観からもなじまれている。映画『サウンド・オブ・ミュージック』の主人公マリアは一家が独軍に追われ修道院裏口から逃げ出す危機の時、「われ山にむかいて目をあげる」と叫ぶ。そしてスイス・アルプスへの国境を超える。山々は神がいます所を暗示している。第二の考え方。山は危険な場所である。強盗が襲う（ルカ10:30 ）。人生の危険を予想している。この詩の時代を、捕囚期の終わり帰還の前と考えれば、超えねばならない国境の山々の険しさ困難を暗示する。「山々を仰ぐ」とは、行く手の「旅」の危険を想像させる。

4、「天地をつくられた主のもとから」は、山の高みに聖所を持つ異教のカナン宗教の否定である。被造物（自然、人間の文化、経済の力）を絶対化してはならない。安倍の「経済の発展が人間の幸福」「抑止力が平和」という神話とは闘う以外にない。

5、「まどろむことなく」。カナンの植物神は冬眠をする（列王上18:27fエリヤの物語）。「主はあなたを見守る方」(5) の「見守る方」はこの詩編に６回出てくる。見守る方に覚えられていることはどんなに慰めか。新約聖書コリントⅡでは、は「イエス・キリストの父なる神」を「苦難に際して私たちを慰めてくださる神」と表現している。それゆえに私たちも苦難にあるものを慰めることが許されている、と励ます。「慰める力」が「慰める方」を悟らせる。「出で立つのも帰るのも」(8) 。旅の終わりはこの世を出て立ち、神の御許に帰る時ではないか。葬儀の出棺式でいく度読んだことであろうか。それぞれに与えられている「慰める力」に気付き大切にしたい。

「自分が自分になる」　2015年10月18日　明治学院教会　岩井健作

マルコによる福音書　8章31節―38節

「自分を捨て、自分の十字架を背負って、私に従いなさい」(34)

1、日常の自分には形容詞をつけて見つめている自分というものがあります。例えば、俺はダメな人間だ、バカだとか、また反対に、結構賢いんだぞとか、実力があるんだぞと思っている、とか。プライドを持ったり、卑下したりしている自分の姿です。喜んでいる自分。悲しんでいる自分。戦闘的な自分。浮かれている自分。他人を気にしている自分。唯我独尊の自分。明るい自分、暗い自分。頑固な自分。融通無碍な自分。まだまだどんどんでて来ます。しかし、形容詞を付けては表現できない固有な自分というもの、形容詞や説明では表わせない00は00だと、自分を自覚している部分があります。例えば「岩井健作」は「岩井健作」だと言う様に、形容詞では表わせない自分です。昔から変らない自分であるし、周りの人が「岩井健作だ」と認めている自分です。後者を言い表す言葉に「アイデンティティー(identity)」という言葉が良く使われます。

2、アイデンティティーとは何か、と思って、外来語辞書を引いてみました。正体、身元、同一人物であること、主体性、存在意識などと説明されています。アメリカの精神分析学者エリクソンが『幼児期と社会』という本の中で、アイデンティティーとは生まれた時からず一っと自分だということの連続の意識、もう一つはまわりの人から自分が受けいれられ、認められている存在感を実感することである、と言っています。

3、聖書のマルコ福音書にはイエスの有名な言葉があります。「自分を捨て、自分の十字架を背追って、私に従いなさい」(Mk8:34)です。前段の文脈に重ねて見ました。初めにでてくる、「自分を捨て(否定する―田川訳)」というのは、形容詞のついた「自分」ではないかと、思います。形容詞を付けて表現できる様な「自分」は捨ててしまいなさい、ということです。いずれにしろ、なにがしか格好を付ける「自分」というものは、どうでもいいではないか、ということです。私は神学校に入って、その格好を付ける「自分」を鋭く指摘されて、「本当にまいった」経験を思い出します。「岩井の、そういう所がアカンところや」と。それに足をさらわれない様に自覚を深めて、この歳までまいりましたが、今に至るも、「自分を捨て続けて」います。いまだに「捨てきれて」はいません。だから、生きている限り「捨て続けなアカン」と思っています。

4、二番目の「自分」は「存在する自分」のことですが、これは宗教的(聖書的)な表現で言えば、「生かされている自分」「共生の命を許されている自分(自分は独りであるがゆえに共に存在させていただいている)」「"神"との関わりに生かされている」という実感です。その自分が、"歴史"の中に生かされていいる限り、様々な抵抗、課題を負って生きています。それは人それぞれに違うこともあり、また同時代の共通の課題もあります。(例えば「戦争と平和」「国家と宗教」)。このことを「十字架」という表現に集約しているのが、「自分の十字架を負って」ということだと理解しています。「十字架」は命を奪う諸力の象徴です。事実イエスは、命を十字架上で奪われました。そのイエスの後を追って(従って)、生きなさい、というのが、この箇所の「招き」です。イエス(神)の招きである以上、私たちはひたすら「招きに応じて」生きれば良いのだ、またそのことは可能なのだと思っています。その全過程を「自分が自分になる」と表現して見ました。

5、神戸で尊敬していた教会員山下さんは、自分にとって教会とは「山下が山下にな所だ」と言っておられたことが忘れられません。アララギの歌人でした。"つきつめて しもべ一人(いちにん)が ためなりし 一会(いちえ)の思い あたためて来しを"(『山下長治郎歌集』P.100)。イエス(神)との出会いをあたためてきたのは、つきつめれば、自分というこの一人のためなのだ、という、永遠との出会いで自分が自分になっていく"恵み"を詠んでいます。鹿島県鹿島(しかしま)の小学校を出て、実々と仕事を重ね、1928年矢部喜好(キヨシ)牧師から受洗、生涯清貧で、1946年神戸教会に転籍以来、誰れよりも忠実な信仰と教会生活を送り、岩井をこの教会の牧師に招聘した中心的人物でした(1907~1993)。歌集は笠原芳光氏と私が出版しました。

永眠者記念礼拝　　2015年11月1日

説教題「聖徒の交わり」　　前 明治学院教会　岩井健作

聖書　ヨハネの黙示録２１章１節ー四節（新約４７７頁）

「私はまた、新しい天と新しい地を見た。」(21:1)

１、ある方が「母が亡くなってから、もう母は居ないという思いと同時に、今までより母が一層身近に感じられる様になった」といっておられました。そういえば私なども父が亡くなって３２年、私自身が父の死去の年齢を超えましたが、単に「歴史の人」という過去の人ではなく、常に語りかけてくる存在になっています。それだけではなく、今度群馬県に住んで安中教会の礼拝に出ていると、新島襄の人格以来の何代にも渉る群馬に関わる人格の集積を感じます。ここである神学者の言葉を思い出します。

２、「人間の本質は、霊魂というモノでもないし、個別存在でもない。人間の人格とは、関係によって構成される豊かな内容を持つ。人の一生に出会う多くの人々との関わりの集積総体が人格というものである。孤立した人間あるいはキリスト者と言うものはない。キリスト者とは教会という生命体の、交わりを基盤として成立するものである。そこから考えると『生きているものが死んだものを弔い、末永く死者を記念することは、世の習わしであるが、逆に、死者が生きている者を支えている』と言うことはあまり認識されていない。「生と死」「生者と死者」との有機的関係、相互媒介的関係、を考えると、死者の果たしている積極的役割が認識されねばならない。」（大林浩・ラーガスト大教授）

３、今日お読みした聖書はヨハネ黙示録です。キリスト教徒を迫害したローマ帝国の支配者たちの滅亡が幻として描かれています。現実は過酷な「絶望」を引き起こす事態だったと思います。しかし、迫害の苦難のなかで、新しい天地（天上界）の秩序から現世を相対化して、生き抜いたのです。ユダヤ教が苦難のなかで残した遺産だった「黙示文学」（ダニエル書など）という方法で信仰の全うを語ったのが初代教会の信仰です。

４、ここで用いられている「新しい」という言葉に注目したいと思います。ギリシャ語には「新しい」という言葉が二つあります。「ネオス（neos)」と「カイノス(kainos)。用法がそんなに厳密に区別されている訳ではありません。強いてその違いを捉えれば、ネオスは時のながれのあたらしさ、時が経つと古くなります。新しい着物といった意味です。カイノスはネオスとは共存しない別の新しさ。「見よ、私は新しい天と地を創造する」（イザヤ 65:17)のごとく、神による創造の新しさです。出会いの新鮮さです。

５、「聖徒の交わり・・・を信ず」というのは古い使徒信条のなかの一節にある表現です。生者が死者を記念すると同時に、死者が生者を支えているのです。ネオスではなく、カイノスの出会いです。

６、今日永眠者名簿に記されている方々。近年神の御許にまされた、上条実さん、栗崎好一さん、渡辺寛さん、小林あやさん、のことを深く想い起こします。これらの方々は過去の人ではなく、新しい（カイノス）の交わりのうちにあります。私は阪神大震災で多くの親しい方々との死別を経験しました。木原栄二さんは家屋倒壊で、階下にいたお連れ合いと長男道夫君を即死で失われました。助けだされた幼き長女と次女と共に、失意の中にも仮家屋と仮印刷所の仕事場を応急に建て、天上の家族と地上の家族との会話をしながら生き続けました。その対話を『紙の碑』として後出版されました。涙無しには読めない「聖徒の交わり」の記録です。そんななかで私の『地の基震い動く時』（旧版）を出版して下さいました。その後、彼も54才の若さで癌で世を去りました。彼とは私も天上と地上の対話をしつつ「聖徒の交わり」に生きています。

２０１５年１２月１３日（日）　　待降節第三主日

説教題　「待つ」　　明治学院教会前牧師　岩井健作

聖書　ヨハネの黙示録２２章１２節－２１節（新約４７９頁）

「『然り、わたしはすぐに来る。』アーメン、主イエスよ、来てください。」（20節）

１、聖書のメッセージでは「神の招き」がまずあって「人間の応答」がそれに続く。この順序は決して逆ではない。例えば、「福音書」のペトロの場合も、イエスの「わたしについて来なさい」の招きがあって、ペトロの「従った」という応答が続く。「恵みと受容」「神の義と信仰」「約束と待望」みな然りである。太宰治の作品「走れメロス」では、友人セリヌンティウスとメロスとの確固たる信頼の感動的物語である。王の人間の信頼への懐疑にも拘らず「待つ」という行為が成り立っている。「待つ」ことは単なる受け身ではなく、関係の受容的能動である。

２、ヨハネ黙示録も「然り、わたしはすぐに来る」(20)というイエス来臨の約束が告げられて「アーメン、主イエスよ、来て下さい」(20 後半）という応答が続く。「来てください」という積極的切望、「待つ」という姿勢が語られるゆえに、古来このテキストは待降節の聖句として選ばれている。

３、ヨハネ黙示録には様々な表象が用いられいる。その読解には謎解きが必要である。この書は「皇帝礼拝」が強制されたローマ帝国ドミチアヌス帝時代のキリスト教徒弾圧と迫害の中での著作であるがゆえに、「黙示文学」（例えば旧約のダニエル書）の暗示のような表現形式をとる。作者はパトモス島に幽閉の刑の身でありながら、小アジア七つの教会の信仰を鼓舞する。今は闇であるが、新しい天地が出現し、神と子羊なるキリストが親しく信徒と共に住むようになる。義人の受ける苦難をイエスゆえの苦難としつつ迫害を耐え終末の救いに与かるものとなれ、と励ます。皇帝の悪魔的支配は必ず滅び神の支配が貫徹する。２２章はその要約とまとめの部分である。

４、１７節に注目したい。霊（予言者）と花嫁（７つの教会の代表）に示される司会者と、その会衆との礼拝での交唱が想定されている。「主よ、来てください」と司会者が叫ぶと、会衆が「来てください」と唱和する。著者は教会とは迫害の中でも基本的にキリストの来臨を、心して待つ存在だと理解している。「キリストの側からの約束に根拠づけられ、促されて、信徒の口をついで『主よ、来てください』が出て来ている」（佐竹明注解）。「ヨハネ第一の手紙」の、良く知られた表現、「わたしたちが愛するのは、神がまずわたしたちを愛してくださったからです」(4:19)と似た構造を持つ。黙示録は、ヨハネ第一に比べれば、格段と歴史の状況が厳しい。「愛」という関係よりも、「待つ」というぎりぎりの主体的能動が強調される。

５、我々も闇の世を生きている。「アベ」は確かに「人の命」よりも「経済（お金）と軍事力」を大事にする。「アベ」を選び支える「多数の国民そのもの」、またそれをよしとする「世界の状況」は闇である。もちろん闘う市民・学生・民衆がいる。そして７０年も闘い続ける「沖縄の民衆」は闇の中でも励ましを与える。しかし、その底に、一般化することはできないが、世に打ち勝ち給う主イエスの確かな存在があることに確信をおくのがキリスト者であり、教会である。そして「待つ」という生きる姿勢（終末論的生き方）を確かと証しするのがキリスト者の証しというものであろう。